



関西大学独逸文学会研究発表概要（第111回研究発表会）

その他のタイトル	Resumee der Referate bei der Tagung 2018
著者	Robert F. Wittkamp, 永沼 琴子, 嶋田 宏司
雑誌名	独逸文学
巻	63
ページ	91-97
発行年	2019-03-20
URL	http://hdl.handle.net/10112/00018675

関西大学独逸文学会研究発表概要 (第111回研究発表会)

シンポジウム：ハインリッヒ・フォン・クライスト『チリの地震』テキストを読む

Zusammenfassung des Symposiums

Robert F. Wittkamp

Das Ziel dieses studentischen Symposiums war eine Verbesserung und Vertiefung des Verständnisses von Kleists Erzählung *Das Erbeben in Chili*. Zunächst erfolgten von Studierenden des zweiten und dritten Studienjahres drei Kurzpräsentationen zu allgemeinen Fragen: 谷久留美 gab einen Überblick zu Kleists Leben und Werk, 西田克生 eine Zusammenfassung der Erzählung, und 幸村有姫 erläuterte die Struktur des Einleitungssatzes (Exposition) der Erzählung, mit dem Ziel, die Schwierigkeiten bei der Übersetzung aufzuzeigen; dazu verglich sie die vier vorliegenden Übersetzungen ins Japanische mit dem Originaltext (Brandenburger Ausgabe).

Nach diesem Einleitungsteil folgten der Beitrag von 永沼琴子 (siehe unten, Abstract) sowie eine Analyse des Erzähltextes von Robert F. Wittkamp, die sich mit besonderen Merkmalen der Erzählung beschäftigte. Das Ziel insgesamt war eine Verbesserung des Textverständnisses, wobei es allerdings nicht um Interpretationen und außertextuelles Wissen, sondern um Analysen innerhalb des Textes beziehungsweise die Beobachtung des Textes ging („beobachten“, verstanden mit Niklas Luhmann als unterscheiden und beschreiben). Die leitende Frage bei dem erzähltextanalytischen Ansatz der beiden Vorträge

(Naganuma und Wittkamp) lautete nicht „Was wird erzählt?“, sondern „Wie wird erzählt?“.

『チリの地震』と句読点

永沼 琴子

ハインリヒ・フォン・クライストは句読点の使い方の特徴があり、今回の発表ではこの観点から短編小説『チリの地震』を分析した。クライストの文体は、一つの文にいくつもの副文とコロンの(Kolon)¹が入り込んでいるために複雑である。

In St. Jago, der Hauptstadt des Königreichs Chili, stand gerade in dem Augenblicke der großen Erderschütterung vom Jahre 1647, bei welcher viele tausend Menschen ihren Untergang fanden, ein junger, auf ein Verbrechen angeklagter Spanier, Namens Jeronimo Rugera, an einem Pfeiler des Gefängnisses, in welches man ihn eingesperrt hatte, und wollte sich erheben. (Kleist, 1993)²

上記の網掛けの部分がすべてコロンのことである。語群のまとまりであるコロンを多用すると、それだけコンマが必要になってくるため、一文一文が長くなっていく。それ故にコンマの数が多く、ピリオドの使用数が少ないのだと考えられる。

今回の発表で最も注目したのは直接話法である。この手法を用いるには、引用符を使うのが通例であるが、『チリの地震』ではもっぱらDoppelpunktを置いたあとに会話文を直接引用しており、引用符を用いた会話文は四ヶ所のみであった。最初に出てくるのはドンナ・ジョゼ

1 句読点のDoppelpunktとは異なる。古典修辞学において詩句や散文の単位のこと、コンマで区切られた部分を指す。

2 Kleist, Heinrich von ; Hrsg. von Reuß, Roland ; Staengle, Peter : *Sämtliche Werke / Brandenburger Ausg. 2, Prosa. Bd. 3 Kleist, Heinrich von : Das Erdbeben in Chili*. Basel ; Frankfurt am Main : Stroemfeld, 1993.

フェという女性の台詞であるが、他の三ヶ所の話者は全てドン・フェルナンドという人物になっている。作中では、フェルナンドは物語中盤で登場し、若く、身なりの良い男で、町の軍司令官の息子でもあり、妻子持ちの青年である。四つの直接話法の内、その三つがフェルナンドの言葉ということに加えて、残るジョゼフェの台詞もフェルナンドに向けて言った言葉であり、この青年が作中において注目に値する人物であることが窺える。では、それぞれの直接話法は何を示しているのか。まとめると、一ヶ所目は、フェルナンドがジョゼフェを品のある若き貴婦人であると認識する。これ以降、二ヶ所目は、フェルナンドが冷静沈着で、慎重、頭脳明晰であり、三ヶ所目は、フェルナンドが英雄的な人物であり、四ヶ所目は、フェルナンドが臨機応変に行動できる人物であるといった、彼の人物像が読み取れるものとなっている。以上のような性格を持つフェルナンドは物語の主人公のようであるが、中盤以降、まさにフェルナンドを中心にして物語は展開していく。ここから可能性として考えられるのは、フェルナンドが特別で重要な人物であることを強調するために引用符付きの直接話法を用いたということである。この他、セミコロんと、広義の句読点の一種として改行について言及した。

表現層の意味化としての翻訳の問題

Robert F. Wittkamp

In diesem Beitrag ging es um Phänomene der Erzählung, die in den Literaturwissenschaften als Semantisierung der Ausdrucksebene bekannt sind, in der Erzähltextanalyse aber auch als mimetische Darstellung von Inhalten der Erzählung beschrieben werden. Als Beispiel wurden Jeronimos gehetzte Flucht aus den Trümmern des Gefängnisses, wo er sich gerade in dem Moment des Erdbebens erhängen wollte, und der Stadt gewählt. Diese dramatisch und erzählerisch (rhetorisch) komplex geschilderte Flucht findet ihren Höhepunkt in der Ohnmacht auf dem Hügel (!) vor dem Tor der zerstörten Stadt, deren Darstellung wiederum zu Jeronimos langsamen Wiedererwachen sowie der sich anschließenden Suche nach seiner Geliebten überleitet. Die Erzähltechniken bei

der Darstellung der Flucht und des Wiedererwachens lassen sich nur im Kontrast zueinander verstehen, wofür zwei Begriffe aus der Musik entliehen wurden: Staccato („hier ...“, „hier ...“, „hier ...“) und Legato („w...“; tatsächlich stammt die Metapher von Nelson Goodman, freilich in einem anderen Zusammenhang).

Weiterhin wurde gezeigt, dass der japanischen vormodernen Literatur die Semantisierung der Ausdrucksebene beziehungsweise mimetische Darstellung ebenfalls nicht unbekannt sind. Als Beispiel für Staccato und Legato dienten zwei Haiku von Taneda Santōka, aber auf eine umfassende Übersetzungskritik der gewählten Textpassagen aus der Erzählung Kleists musste aus Zeitgründen verzichtet werden.

ダダイスト、クルト・シュヴィッターズの鳥とアンナ・ブルーメ
— ダダ的抒情詩「アンナ・ブルーメに寄せて」の解釈を試みて —

嶋田 宏司

ハノーファーを中心に活躍したダダイスト、クルト・シュヴィッターズ (Kurt Schwitters, 1887-1948) が詩人としてのデビューを飾った作品「アンナ・ブルーメに寄せて」(An Anna Blume, 1918年、図1)には、一羽の鳥を持つ奇怪な女性アンナ・ブルーメの姿が叙述されている。この女は逆立ちして歩き、赤い「質素な普段着」を着、髪の毛の色は黄色とされるが、それは「青である」と、彼女を恋慕う「僕」によって主張されている。また、アンナが持つ鳥の羽根は緑色であるが、その鳴き声は赤い。このように叙述において矛盾した存在を「僕」は情熱的に語り、恋慕の情を告白するのであるが、その「僕」にしてもアンナ・ブルーメを「27の感覚で愛する」という異形の人間である。本発表では、このアンナ・ブルーメが「鳥を持つ」*einen Vogel haben* というに記述に着目した研究を紹介した。それというのも、「アンナ・ブルーメに寄せて」では *Anna Blume hat ein Vogel.* と記されており、ここに記された *Vogel* は標準の言い回しにおける男性対格ではなく、主格をその不定冠

詞が示しているからである。さらに鳥という創作のモチーフはシュヴィッタースの作品中に頻繁に登場する。この事実からシュヴィッタースが鳥に込めた意味を考察し、アンナ・ブルーメに擬せられた女性を推測した。そしてこの一行のさらなる読解の可能性を提示した。

ドイツ語で「鳥を持つ」という言い回しは「頭がおかしい」という意味である。シュヴィッタースが構想を残していた、愛鳥家が登場する未刊行の小説のタイトルは「狂いの国から」(Aus dem Land des Irrsinns, 1937-38)とされている。また異常な精神状態を扱った初期の詩には、鳥の糞にまつわるエピソードが書かれている。

彼の本領であった造形美術においても、「精神科医」Irrenarzt という題のアッサンブラージュ作品が制作されており、他にも狂気を暗示する素描が描かれている。このようにシュヴィッタースの創作においては、精神病が動機の一つをなしており、鳥というモチーフとの密接な関連が考えられるのである。

シュヴィッタースのバイオグラフィーについて各文献を比較すると、一致を見ない特定の個所があらわれる。それは彼がてんかんを患っていたために、第一次大戦時に徴兵されたものの後方勤務に回されたという部分である。さらに彼自身が記す病名にも一貫性がない。実際に彼がてんかん患者であったかどうかについては、当時の診断技術の限界ゆえに、今となっては確定することはできない。しかし、彼の病について語っている友人の証言もあり、さらには「アンナ・ブルーメに寄せて」発表後に寄せられた苦情の中には、精神医学の教科書を参照せよ、そこに同種の表現がある、と彼をさげすむ言葉がある。シュヴィッタース自身も精神医学の用語を著述に使用しており、何らかの理由で専門書にあたった形跡が認められる。シュヴィッタースは、当時の精神医学では

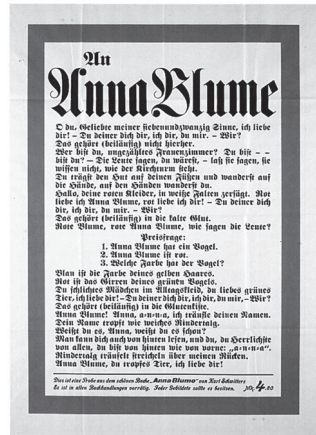


図1、「アンナ・ブルーメに寄せて」ポスター、1920年

「狂い」に分類されていた病を患っており、またある程度その事実が世間に広まっていたと考えられる。そのうえで彼は自らの持病を創作動機の一つとしたのである。

詩「アンナ・ブルーメに寄せて」における「鳥を持つ」という表現は、「アンナ・ブルーメは鳥を持つ」と書かれた板切れを偶然に発見したことがその発祥である。これはシュヴィッタースのアトリエを訪れた友人シュペンゲマンの証言が示している。シュヴィッタースはこの一文に着想を得て造形美術作品に書き付け、さらに詩作にも使用していたのであった。

一方でシュヴィッタースの妻ヘルマを描いた肖像画のひとつ（1917年作、図2）には、ヒナギクを手を持つものがある。このヒナギク *Bellis Perennis* はドイツ語で *Gänseblümchen* であり、「ガチョウの花」の謂いである。ガチョウは初期の素描作品群に繁く登場し、その中には *Anna Blume* の文字が書き込まれた作品も多くある。またシュペンゲマンによるシュヴィッタース擁護の一文には、彼が「ヒナギクの前にひざまずき、祈る」という記述がある。このことからシュヴィッタースにとってヒナギクは特別な意味を持つ花であり、妻ヘルマへの愛情とも関連していると考えられる。この *Gänseblümchen* という文字からは *Vogel hat Blume* とも意味を汲み取ることができ、すでに言及した *Anna Blume hat ein Vogel.* との一致を見る。こうしてヒナギクを手を持つヘルマは、メルツ詩の中でアンナ・ブルーメに変身したとも言える。ここに描かれたヒナギクには、ヘルマ、アンナ・ブルーメ、鳥、そして狂いという意味的連関を見出すことができるのである。ヒナギクには鎮痙作用があるとされるが、これがヘルマやクルトにとっても既知の薬効であったとすれば、ヘルマの肖像画およびシュペンゲマンの



図2、《無題（花を持つヘルマ・シュヴィッタースの肖像）》
1917年、厚紙に油彩、66
×49cm、Nachlass Kurt
Schwitters

言葉はさらに意味深くなる。この検証は今後の研究課題としておきたい。

「アンナ・ブルーメに寄せて」は、シュヴァイツァースのダダ的創作活動の総称である語「メルツ」Merz を冠した、メルツ詩 Merzgedicht の第 1 番に位置付けられている。彼にとってダダイズムはナンセンス Unsinn の追求を意味していた。そしてナンセンスは、彼自身の病を源泉とする独自のイマジネーションの表現形式でもあった。シュヴァイツァースは、文学ジャンルであるこのメルツ詩において、妻への愛情を奇怪な女への思慕へと変質させ、ダダ的に表現しようとしたわけである。メルツ制作に突然現れ、彼の病を象徴することになったこのアイドルこそ、鳥を持ったアンナ・ブルーメであった。

